

の傷寒性疾患との鑑別の意味もあつたであらう。

最後に厥陰病であるが、厥陰とは四肢の厥冷であり、主としてシヨック状態で出現する。これは肺炎等で急性心不全になる場合、腸チフスで起こる大量の腸管出血、腸穿孔等の場合、肺炎、腸チフス及びその他の感染症から敗血症になつて、急激な熱の昇降によつてシヨックを起こす場合等が考えられる。

以上述べたように、肺炎及び腸チフスを太陽傷寒、陽明傷寒として二つの典型とするが、それらの変型及びその他の感染症（雑病）も併せて論じているので『傷寒雜病論』とも呼ぶのだと解釈する。

（一）中村昭、西洋、中国、日本のジフテリア史素描、その一、古代・中世、日本医史学雑誌、四一卷、三号、五八―五九頁

（平成八年十月例会）

◇◇◇◇◇ 紹 介 ◇◇◇◇◇

青柳精一著『診療報酬の歴史』

保険医にとつて『診療報酬点数表』と『薬価基準』は座右の書であつて、診療報酬を離れての保険医の存在はありえない。その診療報酬の歴史は関心のあるところだが、意外にも今までこれについての本格的な書物はなかつたという。その意味で青柳氏の今回の大著は画期的であるといえる。

ただ著者がいうように「診療報酬」の語が社会的に認知されたのは、大正末期、健康保険の実施を前にその点数表を「診療報酬点数規程」とされたときがはじめてであることよりしても、評者を含め大半の人が本書を手取る前に予想するのは、このころから激動を経て今日に至るまでの健保を中心とした史書であらうということであらう。ところが本書では全二五章、六三〇頁のうち、この部分について触れてるのは終の方の五章、一八〇頁で昭和初期、健保がやっと軌道に乗つたところで終つている。著者の目標も少なくとも昭和三六年国民皆保険までのカバであるようだが、とりあえずはこまめで一区切としたのであらう。その意味では書名に「前史」と付すか、副題をつけた方が親切であつたと思う。

もつとも著者の構想は医療を考ふるさいにきり離すことが

できない医療費とか医療料金、あるいは薬札、薬価などいわれるものに触れることが重要であり、それには明治や江戸時代、さらには古代のメソポタミヤや中国にまで及ぶ必要があるという認識が前提であったと想像される。つまり本書は診療報酬を軸にした野心的な医療史というふうにとらえることができる。

専門書、学術書であり、謹厳実直な著者はそのような表現を用いていないが、大阪人たる評者が率直にいわせていただければ、*「社会の万事はこれカネ」*である。しかし医療の世界のみに限っては、すべてをカネで律することができず、古来より「医は仁術」といわれ、現在では国によりその差があるとはいえ医療保険を中心とした社会保障に力が入れられている。根源的には医療費についての問題は貧困、つまり低所得階級層への対処方が基本であるともいえよう。

大正一三年生まれの著者が本書の前書きでいうところでは、少年時代は医院待合室の壁に地区医師会による「薬価表」がはり出してあったと。健保以前の診療報酬はこれが大体の目安になった。しかし上述の、ことに大都会で無視できない低所得階級層の存在、そこへ出てきた社会主義の思想の影響などより、本書に詳述されている実費診療所というものが出現し、これが開業医に深刻な影響をもたらし、訴訟問題にまで発展していった。今ならば健保法違反、価格破壊といったところであろうか。

一方、これも本書で一挿話として紹介されているが、ある

金持が病氣となり薬治を受けていたが良くならなかった。ところがある医師が法外な薬価をつけて投薬したら快方に向った。患者はあまりにも高価な薬にすりであつたためこれをきちんと服用したのが良かったのであろうとする。そういえば、健保後でも薬袋に「高価薬」の印の押してある例があつた。このように診療報酬は複雑な性格をもち、今日では国民医療費などに連動する大きな社会的、政治的な問題にまでなつて

いる。

内部資料であつたかと思うが、かつて一部の人に朝日新聞社の『日本の医療』という冊子が高く評価され、利用されたことがあつた。その『日本の医療』研究班の一人に青柳精一という人がいるということは当時から評者の耳にも入つていた。氏は医師ではないが、医療問題についての第一人者として知られ、のち同社刊の医学雑誌『モダン・メデイシン』の編集にタッチ、同社退職後は『日本医師会雑誌』に百余回にわたる「日本医師会小史」の連載を行った。それらの過程でいつしか診療費や薬価に関するメモがかなりの量となり、昭和五八年前より診療報酬を軸とした医療史の構築にとりかかった。ところがまもなく右大腿部脂肪肉腫となり下肢切断という深刻なケースに直面した。その極限の状況下で膨大な資料を収集し、未開拓な分野に挑んだ著者の執念には脱帽せざるをえない。もつとも著者は本書に序文を寄せている大谷藤郎、酒井シヅ両氏のごとき官界・学会の重鎮をはじめ各方面に知己が多く、それらの人の理解・協力も大であつたと思

う。もとよりこれは著者の人柄に負っている。

著者が重要な参考資料としたものに、ふだん注目されることの少ない各府県・郡市区の医師会史がある。いま各地区で医師会史の編纂が盛んであるが、きちっとした内容であればこのような横断的な利用もあり得るということをお教えられた。前述のように著者にはぜひ本書の続編を期待したい。

(長門谷 洋治)

〔思文閣出版・京都市左京区田中関田町二一七、電話〇七五一一七
五一―一七八一、一九九六年二月発行、A5判・六五二頁、定
価一四、八三二円〕

第九十七回日本医史学会総会(札幌)記念出版

北海道医史学研究会編『北海道の医療 その歩み』

本書はサブタイトルが示しているように、平成八年六月二十二日、二十三日の両日、札幌市で開かれた第九十七回日本医史学会総会の記念出版冊子である。北海道医史学研究会の皆さんが、研究会発足当時から念願を三ヶ年間でこの冊子にまとめられた熱意にまず感謝したい。

内容を、蝦夷地の医療、明治・大正期の医療、北海道における医療の専門分化、専門教育の四章に大別して二十三名の先生方が共同執筆されている。従って多彩な内容となっており、どこから読もうかと迷うほどである。

北海道は、①本州の三―四の県を合せたほどの広大な土地

を容れている。②近世末から日本史に関係した土地である。

③アイヌらの原住民が生活してきた土地である等の地域特性を有していることは言をまたない。従って本州人(アイヌからみれば和人)が渡道する以前の時代の医療を含めるということになると、どうしてもアイヌの呪術まで遡及しなくてはならないだろう。

これは言語、ユーカラを含んだ大変な課題で、医史学より文化人類学の分野に突入してしまう恐れが大である。かかる大問題は別としても、一応のアイヌの呪術より医療までの系統的研究は今後の課題として残っている。

そのような分野のことを考えていると、なるほど和人が入っていた蝦夷地の医療に関する研究は、北海道独特の課題であると云えそうだ。言ってみれば開拓時代の医療の研究である。北海道医史学研究会の方々は、これを、陣屋話医師、痘瘡史、コレラ小史、梅毒小史、水腫病小史、薬物誌というパターンからチャレンジされて成果をあげられた。

北海道の夜明けと発展前期にあたる明治・大正期の医療については、開拓使時代の医療、北海道における西洋医学の受容(フランス医学を中心として)、函館病院、開拓時代の札幌病院(本病院としてのあゆみ)、明治初期の根室地方の医療、斉藤龍安の周辺(関寛斎との接点をめぐって)、関場不二彦と北辰病院、赤城信一など、非常に興味深いテーマが目白押しに収載されている。残念なことは時代的な配列が後先になっている点である。原稿の集まり順に編集された故なのかも知れない。